



77年目の終戦の日

仲嶺 真弓

2022年、終戦から77年目を迎えます。

広島ではおよそ16万6000人、長崎ではおよそ7万5000人もの尊い命が一瞬にして失われました。この2県に原爆を投下される以前には、同年3月26日～6月23日 3ヶ月にわたる長い沖縄戦があり、ここ大阪でも3月～8月にかけて8回もの空襲があったことが歴史に記されています。その他日本各地でも爆撃はあり、はかり知れない尊い命が失われた末に、1945年8月15日 日本は終戦の日をむかえました。この事実は決して忘れてはいけなく、後世に語り継いでいかなければならない歴史です。

今年もそれぞれの地で原爆犠牲者慰霊式並びに平和祈念式典が行われます。8月6日は広島、8月9日は長崎で。沖縄は、太平洋戦争末期の沖縄で、旧日本軍の組織的な戦闘が終わった日とされる6月23日に慰霊の日をむかえました。2022年の沖縄は同時に、1972年5月15日に沖縄の施政権が日本に返還され、本土復帰50周年を迎えました。大阪で生まれ育った私ではありますが、ルーツは沖縄で、遠い幼き日の記憶を辿ると、50年前の6歳の私は、祖母、母と共に沖縄の地を訪れていた記憶が蘇ります。パスポートなく沖縄との行き来が可能になり、祖母の里帰りを兼ねて、祖母の兄にあたる親戚の家に泊めてもらったのは1972年の夏でした。はじめてのエイサーの太鼓の鼓動は、何も知らない幼心には怖く、今考えると魂の疼きにも似たそのエネルギーを全身で感じ取り、どうしていいのかわからず母の手を握りただ茫然と立ち尽くしていたように思います。まつりの後に手にした線香花火は、火が怖くて後ずさりしていたのに、最後に落ちた火球があまりにきれいで触れてみたくなり、人差し指を火傷してしまいました。その夜に入った五右衛門風呂は、再び火傷しないかと怖くて泣いたことを今でも鮮明に覚えています。そんなことを思い出しながら、6月23日沖縄の慰霊の日の式典の映像がテレビで映され、小学2年生の女の子が平和への想いを朗読している姿を見ました。思わず、その詩（以下に紹介）を身じろぎもせず聞き入る自分がいました。

今もなお、戦争が続く国があるのに、戦火の中で生きる人たちのために何もできずにいる自分がかたじけなく思います。だから、せめてこの詩を胸に刻み、平和への思いを込めて、これから生きる子どもたちのところに耳を傾け、共に生きることの大切さ、心地よさを伝えていきたいと思いました。

山内小学校2年、徳元穂菜さんの詩『こわいをして、へいわがわかった』
びじゅつかんへお出かけ おじいちゃんやおばあちゃんも いっしょにみんなで
お出かけ うれしいな
こわくてかなしい絵だった たくさんの人がしんでいた
小さな赤ちゃんやおかあさん 風ぐるまや チョウチョの絵もあったけど
とてもかなしい絵だった
おかあさんが、七十七年前のおきなわの絵だと言った
ほんとうにあったことなのだ
たくさんの人たちがしんでいた ガイコツもあった わたしとおなじ年の子どもが
かなしそうに見ている こわいよ かなしいよ かわいそうだよ
せんそうのはんたいはなに？ へいわ？ へいわってなに？ きゅうにこわくなって
おかあさんにくっついた あたたくなくてほっとした これがへいわなのかな
おねえちゃんとけんかした おかあさんは二人の話を聞いてくれた
そして仲なおり これがへいわなのかな
せんそうがこわいから へいわをつかみたい ずっとポケットにいれてもっておく
ぜったいおとさないように なくさないように わすれないように
こわいをして、へいわがわかった